

# ウルグアイ政治に軍部が(再び)台頭するのか

——2019年ウルグアイ大統領・上下両院議員選挙における「マニーニ・リオス現象」に関する一考察

## ¿(Re)surgimiento del sector militar en el ámbito político uruguayo?

:apuntes preliminares para un acercamiento al “fenómeno Manini Ríos”  
en las elecciones presidenciales y parlamentarias de Uruguay 2019.

内 田 みどり

Midori UCHIDA

(和歌山大学)

中 沢 知 史

Tomofumi NAKAZAWA

(京 都 外 国 語 大 学  
ラテンアメリカ研究所客員研究員、  
元在ウルグアイ日本大使館専門調査員)

2019年10月11日受理

### Abstract

¿Quién es Manini Ríos? Desde que fue destituido de su cargo de comandante en Jefe del Ejército uruguayo, formó su partido político Cabildo Abierto, se postuló como candidato presidencial de las elecciones generales del 2019 y empezó rápidamente a captar popularidad significativa entre votantes. La situación genera varias inquietudes. ¿Es un fenómeno semejante al que tuvo Brasil del 2018?, ¿Por qué se lanzó como político?, ¿Cuáles son sus visiones y proyectos políticos, en que están apoyados, por quién y por cuál motivo? Los autores del presente artículo plantean –en lugar de etiquetarlo como “Bolsonaro uruguayo”– señalar a este aparente “outsider” heredero de la clase alta tradicional política y del sector católico conservador, y que sintoniza con la creciente exigencia de medidas de “mano dura” en la seguridad ciudadana en toda la región. Los autores también intentarán caracterizar esta nueva figura “lobista”, que actúa como representante de los intereses económicos del sector militar que ha sido marginado en la sociedad uruguaya durante las últimas décadas.

### はじめに

ウルグアイはラテンアメリカで最も民主主義的で、政党政治が深く根を下ろしているとされる。政党政治の安定度を示すものとして、特定の政党が一定の支持を続けて得ていれば数値が低くなり、選挙ごとに大きく得票率が異なれば数値が高くなる「選挙変易性 (electoral volatility)」という指標がある。ウルグアイはこの選挙変易性が域内でも最も低い水準で安定している国である<sup>1</sup>。したがって、2019年10月末に行われる大統領・上下両院議員選挙も、2014年や2009年と同じような戦いになるはずだった。すなわち、治安、教育、経済成長を争点とした、現与党拡大戦線と最大野党国民党の候補の一騎打ちである。かつては一党優位政党だったが今は見る影もないコロラド党の候補が三番手に位置し、そのほかに極左や環境保護などを掲げた弱小政党が議席を得ようとして躍起になるという図式である。治安問題について、目標は異なるが国民投票が行われることも2014年と同じだ。

ところが2019年は違った。まず、大富豪の若者が金にものをいわせて国民党の予備選に参入した。これはアウトサイダーが既成政党のインサイダーになったケースだが、既成政党からの誘いを断って新党を結成し、

2019年10月初頭の時点で10%前後の支持を得ているアウトサイダーがいる。その出身母体は、ウルグアイ社会の中では周辺的な存在である軍隊だ<sup>2</sup>。アウトサイダーの名はマニーニ・リオス (Guido Manini Ríos)。陸軍総司令官を退役後にカビルド・アビエルト (Cabildo Abierto、開かれた市参事会<sup>3</sup>) を結党し、瞬く間に政界の寵児となった彼は、「ウルグアイのボルソナロ」なのか？ 政界に進出した理由は何か？ この謎を解き明かすべく、中沢と内田は2019年9月にウルグアイ現地において識者に対しインタビュー調査を行った。面談したのは、軍政期人権侵害問題並びに人権問題一般に関する NGO である SERPAJ (Servicio Paz y Justicia - Uruguay) 代表マデロン・アギーレ氏 (Madelon Aguirre、2019年9月8日)、ウルグアイ近現代史が専門で歴史と政治の關係に詳しいホセ・リーリャ氏 (José Rilla、2019年9月15日)、同じく近現代史専門だが、通説に異を唱えてしばしば論争を巻き起こすとともに、歴史的記憶の問題に取り組んでいるカルロス・デマシ氏 (Carlos Demasi、2019年9月17日)、世論調査会社 FACTUM を主宰する政治学者オスカル・ボティネリ氏 (Oscar A. Bottinelli、2019年9月16日)、拡大戦線に造詣が深い政治学者アドルフォ・ガル

セ氏(Adolfo Garcé, 2019年9月16日)、保守系週刊誌ブスケダ(Búsqueda)編集長アンドレス・ダンサ氏(Andrés Danza, 2019年9月18日)である。インタビューは、アギーレ氏に関しては内田が、それ以外は中沢が行った。

### マニーニ・リオスとは何者か

マニーニ・リオスとは何者なのか。急ぎょ出版された彼の伝記によれば、彼は1958年8月20日に9人兄弟の下から2番目として生まれた。しかし理由はわからないが、彼の父は子どもの誕生日と異なる日付を出生登録するのが常だったようで、登録上は1958年12月8日が誕生日になっているという。ウルグアイ有数の高級住宅街で海岸リゾートでもあるカラスコ地区で、動物園のように沢山の動物がいる庭がある御屋敷で育ち、フランスびいきの父によってフランス系の小学校に通わされた。1971年に父親が亡くなると、年かきの兄弟が父がわりを務めた。街頭で反騒乱作戦に携わる兵士をみながら少年期を過ごした彼は、1972年、銃弾で穴だらけになった4人の兵士の写真を新聞でみて激しい衝撃を受け、「もしわれわれが戦っているのだとしたら、それに自分も参加したい」と考えるようになる<sup>4</sup>。一般的にウルグアイでは軍人は中産階級以下の出身で、軍人の子弟が軍人になるケースが多いので、彼のように軍隊に縁がない上流階級の子弟が軍に入るのは異例といえよう。

1973年2月、軍部の政治介入を許すボイソ・ランサ協定が大統領との間で結ばれた1週間後に14歳で陸軍中等学校(Liceo Militar)に入学。1975年、16歳で陸軍士官学校(Escuela Militar)に入学。1978年に卒業し、12月、少尉に任官。初任地はサン・ホセ県。次に第14基地でパラシュート部隊に所属。1980年に知り合ったイレネ・モレイラ(Irene Moreira)と1987年に結婚、ミカエラ(Micaela)とブルーノ(Bruno)の二児をもうける。1988年、イラン・イラク戦争の停戦監視、1993年モザンビークのPKOに参加。35歳で大佐に昇進、軍の予算局へ配属。1997年には私立カトリック大学の歴史学部に入學、ここで思想家アルベルト・メトル・フェレ(Alberto Methol Ferré)の薫陶を受ける。2008年2月、軍病院の監督官となり、5年半在職する。軍の病院は地域住民も含め約15万人の利用者(その多くは貧しい人々)がいたが、当時は深刻な専門家不足に陥っており、彼は改革に尽力したという。2012年2月、ムヒカ政権のもとで將軍に昇進し、軍の衛生部門の監督官に着任。普通、將軍は司令官に属するものだが、彼はウィドブロ(Eluterio Fernández Huidobro)国防大臣に直属した。2014年の終わりに陸軍総司令官に選ばれ、2015年2月着任<sup>5</sup>。彼はウィドブロの死(2016年8月)まで4年半、大臣と毎週顔を合わせていた。後述するガバッソの軍事法廷での証言の取り扱いをめぐり、

バスケス(Tabaré Vázquez)大統領やメネンデス(Jorge Menéndez)国防大臣と対立、2019年3月12日、総司令官を解任される。辞任後1か月で自身の政党「開かれた市参事会」を立ち上げる<sup>6</sup>。

面談した識者がこぞって指摘したのが、マニーニ・リオスの政治的な「毛並みの良さ」である。父方は代々コロラド党の家系で、彼の祖父ペドロ(Pedro)は「第二の国父」と言われるバッジェ・イ・オルドーニェス(José Batlle y Ordóñez)政権で、今日でいう内務大臣を務めた。マニーニ・リオス本人に言わせると祖父ペドロは、バッジェとドミンゴ・アレーナ(Domingo Arena)とともにバッジェ主義の根幹を作ったが、バッジェが大統領に代わる行政府として構想した合議体政府(コレヒアード)はガバナビリティの問題を生じさせると考えて、バッジェと対立するに至ったという。ペドロはホセ・セラット(José Serrato)政権(任期1923-27)のもとでは外務大臣を、テラ(Gabriel Terra)政権(任期1931-33, 1933年自主クーデターにより1938年まで独裁)では財務大臣を務めた。デマシによればペドロはファシストで、日刊紙ラ・マニャーニャ(La Mañana)の付録としてラ・ノーチェ(La Noche)という極右新聞を出していたが、この新聞は欧州におけるファシスト体制崩壊を受けて焼却処分され、今や国立図書館にすら所蔵がなく個人のコレクションとしてしか残っていないという。叔父のカルロス(Carlos)は、1960年代のヘスティード(Óscar Gestido)政権やパチェコ・アレコ(Jorge Pacheco Areco)政権で様々な大臣職を務め、1970年代には駐ブラジル大使、民政移管後のサンギネッティ(Jurio María Sanguinetti)政権では内務大臣を務めた。デマシによれば、カルロスは素晴らしい歴史家でもあったという。一方、母方の曾祖父アベラルド・マルケス(Abelardo Márquez)は、バッジェに反旗を翻した国民党の英雄アパリシオ・サラビア(Aparicio Saravia)の軍の大佐だった。また、カビルド・アビエルト結党とともに合流した妻のイレネは、国民党のアルティガス県議会議員を務めていた<sup>7</sup>。

### マニーニ・リオスをめぐる政軍関係

ダンサによれば、マニーニ・リオスの政治的発言が初めて注目されたのは、2018年5月18日のラス・ピエドラスの戦い207年目の記念式典での発言であるという<sup>8</sup>。内田がマニーニ・リオスに注目するようになったのは、2018年9月に軍人年金<sup>9</sup>の改革をめぐって「寛大で漸進的な改革だ」と発言した労働大臣を、ラジオでうそつき呼ばわりした事件がきっかけである。軍人は政治的発言をしてはならないという法律に違反したかどで、彼は大統領から重禁錮(Arresto riguroso)30日を命ぜられてしまう<sup>10</sup>。しかしこの処分によって沈黙することなく、2018年末にはクリスマス・メッセージとして「憎しみを売りさばくような行為に反対。オリ

エンターレス(東方人。植民地期のウルグアイ領民の呼び名)のなかで分断され対立しながら生きるのには反対」とツイートして、拡大戦線支持者の不興を買った<sup>11</sup>。同じ頃、退役軍人を中心として、彼が2020年に退官したあかつきには政治家にしようという動きがあらわれる<sup>12</sup>。2019年2月には、人権侵害問題で訴追されている軍人たちの権利が十分守られていない、裁判所は不確かな証拠に基づいて憶測で有罪を下している、と司法府を批判。この件によってマニーニ・リオスはバスケス大統領に解任されてしまう<sup>13</sup>。

2019年3月末にオブセルバドール紙<sup>14</sup>のスクープによって、元軍人ガバッソ(José Nino Gavazzo)の軍事法廷での発言とその扱いをめぐる問題が明らかになり、この件でもマニーニ・リオスは物議を醸している。ガバッソは軍の反騒乱作戦調整機関(Organismo Coordinador de Operaciones Antisubversivas, OCOA)や情報・国防機関(Servicio de Información y Defensa, SID)の重要人物で、2009年に28件の殺人で有罪判決(25年)を受けている。ガバッソは2018年に、軍人として守らねばならない名誉を汚したかどうかを判断する軍事法廷(Tribunal Militar de Honor)で、1973年3月12日(つまりクーデター以前)に拘束された都市ゲリラ・トゥパマロスのメンバーであるゴメンソーロ(Roberto Gomensoro、2002年に遺体の身元判明)の死体をネグロ川に投げ込んだのは自分だ、と発言した。これがきっかけでいくつかの深刻な問題が生じた。まず、ゴメンソーロ事件ではすでに元トゥパマロスのブランコ(Valerio Blanco)の証言で別の元軍人ゴメス(Juan Carlos Gómez)が有罪となっており、証言の信ぴょう性や裁判所の判断が疑問視される結果を導いた。ガバッソによればゴメスは無実で、ガバッソと同時に裁かれた元仲間のシルベイラ(Jorge Silveira)によれば、ゴメンソーロ事件の責任者はガバッソである。二つ目は、軍事法廷の規則(第77条)によれば、法廷で犯罪が明らかになれば、その情報を司法府に送らねばならないとされているのに、2019年2月の軍事法廷の控訴審判決は「ガバッソは軍の名誉は傷つけていないが将校団の名誉を傷つけた」として制服の着用と中佐を名乗ることを禁じたのみであった、と大統領に報告されただけだったという。おまけに、ガバッソの証言を司法府に通知しなければならなかったのにそれをしなかった、という問題(刑法177条違反)について、マニーニ・リオスはメネンデス国防大臣に伝えたといい、メネンデスは大統領と大統領補佐官に伝えたと言っているが、大統領府はこの件について沈黙を保っている。メネンデスは健康問題を理由に辞任し(副大臣も同時に辞任)、そのすぐ後に亡くなった。

#### マニーニ・リオスの政治的立場

ダンサとガルセは、ともにマニーニ・リオスをイデ

オロギー・スケール上の右に位置づける。ガルセによれば、自分を右派であると位置づける有権者は全体の1/4に及ぶのに、今回の選挙戦では拡大戦線のマルティネスが中道左派、コロラド党のタルビが中道、国民党のラカジェ・ボウが中道右派で、右のスペースが空いている。マニーニ・リオスはその空隙を埋めたというのだ。またガルセは、ウルグアイでは右派は歴史的に弱い、右派は祖国愛を重視し、モラルとしては(世俗的なウルグアイにあって)カトリック信仰を軸に据え、イデオロギー的に保守的で、自由より秩序を好み、トランスジェンダーや中絶自由化といった新しい人権をほとんど支持しないと指摘する。更に、ウルグアイでは国防予算が少ないことから軍にとっては大きな国家である方が好都合であるため、マニーニ・リオスは新自由主義的ではなく国営企業の民営化にも反対するであろうという。なおボティネリによれば、(公の場に宗教を持ち込まないことが国是であるウルグアイで)マニーニ・リオスは司令官として軍隊内でミサを行った初めての人物だという。

後述するように、マニーニ・リオスは折に触れ自分はアルティガス主義者(artiguista)であるとアピールしているが、ボティネリやデマシによれば、マニーニ・リオスに大きな影響を与えたと考えられるのが、思想家のアルベルト・メトル・フェレである。ボティネリによれば、メトル・フェレはカトリックかつナショナリストで、欧州、特にフランスびいきが多いウルグアイ思想界にあって珍しく反フランスで、そして反米である。識者にとってもメトル・フェレの思想は複雑で単純な分類が困難であるが、神の摂理を強く信じるカトリックであるという点で識者の見解は一致していた。メトル・フェレは、ラテンアメリカ主義者であるという点で例えばビビアン・トリアス(Vivián Trías)のような社会主義者と共通するところがあるが、進歩的な改革を成し遂げたバジャジェ主義の立場とはらず、アルゼンチンのペロンを称賛していた。また、ラテンアメリカの独立は真の独立ではないとの立場から、ウルグアイは独立すべきでなかった、アルゼンチンとともに連邦制を敷くべきであったとの見解を示していた。メトル・フェレはムヒカ(大統領任期2010.3-15.2)を応援していたともいう。メトル・フェレのラテンアメリカ主義について、ガルセはホセ・エンリケ・ロドー(José Enrique Rodó)の影響を指摘する。ロドーは1900年に発表した『アリエル』(Ariel)で、アメリカ合衆国をシェイクスピアの『テンペスト』に登場するキャリバンになぞらえて物質主義的・功利主義的だと批判し、それに対置してラテンアメリカのアイデンティティはアリエルに象徴される精神主義、理想の追求にあるとした。マニーニ・リオスの兄弟であるウーゴ(Hugo)は、2017年までロドニアナ協会(2009年設立)の会長を務めていた<sup>15</sup>。



## マニーニ・リオスの支持基盤

ガルセは、選挙制度がマニーニ・リオスの台頭を促したと考えている。比例代表制は小党が議席を得やすいからだ。ではマニーニ・リオスを支持しているのはどのような人々なのか、また彼が登用しているのはどのような人々なのか。リーリャは、治安問題を巡ってウルグアイ社会の約半数が権威／強権(Mano Dura)を求めていることは否定できないと語る。中沢は、そうした国民感情を救い上げる一方で、作り出しているのがマニーニ・リオスである、と考える。またボティネリは、人々が今の既成政治に飽きてしまい変化を求めている、と指摘する。ダンサも、マニーニ・リオスの台頭はアウトサイダーが人気を得るというラテンアメリカ全体に見られる現象と共通する、という。端的に言って、有権者は同じ党、同じ顔ぶれに飽きてしまったのだ。

マニーニ・リオスは誰に／どこで支持を得ているのか。ウルグアイの選挙では政党ではなく政党内の派閥が議員候補者のリスト(拘束名簿制)を提出するが、1997年の憲法改正によって大統領候補は党内予備選で1人に絞ることになった。6月末に行われた党内予備選において、カビルド・アビエルトの予備選に参加した有権者は、選挙裁判所によれば46,887人いる。オブセルバドール紙によれば、退役軍人会(Círculo Militar)の会長C・シルバ(Carlos Silva)もそのひとりである。シルバは軍人の家族は約15万人いる、と指摘し、ラテンアメリカ諸国を横断する世論調査ラティノバロメトロで軍は市民から最も信頼されている機関である(63%)、とも述べている。他方、農村の電化に尽くした商人であるカバジェロ(Wilmar Caballero)のような人物もマニーニ・リオスに投票している。既成政党に飽き飽きしたので、既成政党と縁がなく全く新しい政党であるカビルド・アビエルトに投票したと語る有権者もいる。多くの支持者は50歳以上の男性であるとの指摘もある<sup>16</sup>。また、オブセルバドール紙が伝える世論調査の分析によれば、ウルグアイの全世帯の16%は軍か警察にかかわりがあり、そのうちカビルド・アビエルトに投票したのは36%に上るといふ。また、全世帯の4分の1は農業とかかわりがあるが、そこでもカビルド・アビエルトは人気を博しているという<sup>17</sup>。ブスケダ誌によれば、マニーニ・リオスはブラジル国境沿いで軍の基地がある内陸の北東部と東部でとりわけ人気が高い<sup>18</sup>。伝統的に内陸部は農牧セクターと関わりが深い国民党の地盤であるだけに、この支持分布は興味深い。

マニーニ・リオスはどのような人物を登用しているのか。彼が副大統領候補に選んだのは、国民党のラカジェ政権期に大統領府書記官を務め、2019年3月に国民党を離党したギジェルモ・ドメニチ(Guillermo Domenech)である。ドメニチはマニーニ・リオスを政

界へ送る運動であるアルティギスタ社会運動(Movimiento Social Artiguista)を創設し、その主だった指導者の一人である<sup>19</sup>。また、モンテビデオ県の下院議員候補者リストのなかには、弁護士で共和国大学の憲法学教授であるエドゥアルド・ルスト(Eduardo Lust)、農牧水産省傘下の国家水資源局の局長や、ウルグアイでミニ・ワールドカップ「ムンディアリート(Mundialito)」が1980年に開かれた際のサッカー協会会長を歴任した御年86歳の元海軍大尉ヤマンドゥ・フランヒニ(Yamandú Frangini)、元国民党の市議員でカテキスタ(キリスト教の教理を教える伝道師)を名乗るエルサ・カピジェラ(Elsa Capillera)、コロラド党、拡大戦線での活動歴を持ち、マルドナド県選出の拡大戦線／MPP(ムヒカの会派)所属下院議員の名づけ子でもあるマルティン・ソダノ(Martín Sodano)の名がある。なお、ルストは政府がフィンランドの木材パルプ会社との間に結んだ第二工場建設契約に反対する訴訟を春に提起した人物である<sup>20</sup>。党派を横断して様々な経歴の人物を採用していることが分かる。

他方、マニーニ・リオスが登用している人物の中には、重大な人権侵害を行った人物が混じっていることに内田は注意を喚起したい。例えばモンテビデオの党代表者会議でナンバー4の地位にあるラダエリ(Eduardo Radaelli)は、ベリオス事件<sup>21</sup>にかかわった3人のウルグアイ軍人の一人であり、2006年にチリに引き渡されて最高裁で有罪判決を受けたのち、2016年に仮釈放されてウルグアイに戻ってきた。しかしマニーニ・リオスは、ラダエリはウルグアイでは証拠不十分で不起訴になっており、チリでの裁判は疑わしい証拠に基づいたものだ、と意に介さない。他方、マルドナド県の候補者リストに上がっているマンヒニ(Enrique Mangini)は、1972年に学生のロドリゲス・ムエラ(Santiago Rodórguez Muela)を殺害した疑いがかけられている<sup>22</sup>。また、治安問題のアドバイザーであるA・ロマネッリ(Antonio Romanelli)元大佐は、1978-79年にリベルター刑務所で拷問を行っており、「反ユダヤ主義者」「精神を病んだ人や老人、脆弱な人に対して、そしてとくにユダヤ人に対してはまさに死刑執行人だった」と41人の元囚人に告発されている人物である<sup>23</sup>。支持者の中にも問題のある人物がいる。スキンヘッドの大男、30歳のG・ドレゴ(Germán Dorrego)は、ナチの鷲の紋章を刺青し、SNSではヘルマン・パンツァーファウスト(Germán Panzerfaust)の筆名でネオナチ思想を広め、反共ロックバンド「88カウンターアタック(Contra Ataque 88)」のメンバーである。ドレゴのことは内務省がネオナチと認定している。さすがにマニーニ・リオスも、ドレゴがネオナチ・グループとかかわりがあることが確認されたら、彼を党から追放すると明言せざるを得なかった<sup>24</sup>。



## 正統性の源泉をもとめて：マニーニ・リオスにみる歴史の政治利用

歴史の政治的利用に関する著作<sup>25</sup>があるリーリャは、新党が伝統政党に対抗するには、支えてくれる伝統が必要である、と指摘する。コロラド党にとっては創設者のリベラやバッジェ・イ・オールドーニェス、国民党にとっては創設者のオリベやアパリシオ・サラビア、ラカジェ・ポウの曾祖父であるエレーラなどがそれにあたる。リベラもオリベもウルグアイを独立に導いた「33人のオリエンターレス」の一員である。リーリャによれば、後発の拡大戦線も伝統を探した結果、アルティガスに正統性を依拠させているという。拡大戦線の「党旗」は青、白、赤の三色であるが、これはアルティガスの旗と同じである。

カビルド・アビエルトもまた、コロラドよりもブランコよりも古く、しかも軍人であるアルティガスに正統性の源泉を求めている、とリーリャは指摘する。前述のラス・ピエドラスの戦いを記念する2018年の式典で、マニーニ・リオスは「一般的にウルグアイ人は、とりわけ軍人は、アルティガス主義者であることを誇りに思う。だが、21世紀にあってアルティガス主義者であるというのはいかなる意味を持つのか」「今日、アルティガス主義者であるとは、人々の近くにあること、とりわけもっとも脆弱な人々の近くにあることを意味する。それは全てのウルグアイ人に対し尊厳ある人生をおくる機会と条件をもたらすための戦いである。その戦いこそ最も重要で、最も緊急に戦端を開かなければならない戦いである。ウルグアイ人同士の共生にますます悪影響を与え、日ごとに生活と希望を奪っている社会的文化的周縁化に真っ向から立ち向かわなければならぬ」と述べ<sup>26</sup>、以降も折に触れてアルティガスに言及している。カビルド・アビエルトの党旗も、アルティガスの最初の旗にならい、青、赤、白でそれに黄色い線が入っている。

カビルド・アビエルトはこの党旗をめぐる拡大戦線と対立した。拡大戦線／MPPのウェルモ(Ruben Martínez Huelmo)議員が「カビルド・アビエルトにアルティガスの最初の旗を使用させない」旨の申し立てを選挙裁判所に行なったのである。ウェルモ議員は、国家がアルティガスの最初の旗を尊重する義務を負い、1月13日を「アルティガスの最初の旗の日」として祝うことを定めた法令19,571号(2017年)の推進者のひとりであった<sup>27</sup>。選挙裁判所の決定は、カビルド・アビエルトにアルティガスの最初の旗の使用を認めるが、排他的に使用してはならないというものであった<sup>28</sup>。

### 「政治家」マニーニ・リオスの目指すもの

マニーニ・リオスは何を目指しているのだろうか。ポティネリは軍人とその家族の福利厚生の問題を指摘する。軍の保険・年金は、一般のシステムから独立し

ており、軍の年金(Caja Militar)は他の年金より優遇されているので大赤字であり、国家から補助を受けているとポティネリもガルセも指摘する。したがって軍の年金改革は昔からの政治課題であったが、軍関係者の反対があり、長い間手が付けられなかった。それを2018年になって拡大戦線が改革したので、軍の組織的利害と対立することになったのだ。またポティネリによれば、カビルド・アビエルトの支持者のほとんどは元コロラド党支持者だが、軍人かつカビルド・アビエルト支持者に限ると元国民党支持者が多いという興味深い支持動向が観察される。軍は長らく一党優位だったコロラド党と関係が深かったので、軍内で国民党支持者はマイノリティである。ここでもマニーニ・リオスは異端(黒い羊、oveja negra)である。

対外戦争の可能性などほばないウルグアイであるので、軍の予算はとても少ない。ガルセの論説によれば、軍政時代にはGDPの3%以上あった国防予算が、2008年には1.32%、2015年には1.10%に減らされ、2015年に当時国防省の副大臣だったメネンデスが「兵士の60%は貧困状態にある」と認めた<sup>29</sup>。ダンサは、マニーニ・リオスは周縁的な存在である軍がもっと社会的に統合されることを望んでいるのではないかと、という。ダンサによれば、2018年のラス・ピエドラスの戦いの記念式典で、マニーニ・リオスは専門職業人としての軍人というよりは、組織としての軍の要求を口にし、軍は愛国者だと述べたという。

ところで、ウルグアイ焦眉の問題のひとつが治安問題である。国民党で長らく派閥領袖を務めるララニャガ(Jorge Larrañga)上院議員は「恐怖なく暮らす(Vivir sin miedo)」をスローガンに、軍を国家警備隊(Guardia Nacional)として国内治安維持に活用するための憲法改正を求めており、これは10月の選挙と同時に国民投票にかけられることになっている。もしこの憲法改正が成立したら、マニーニ・リオスはどういう態度をとるのか。ダンサは、軍が目に見える形でプレゼンスを増大させるような提案をしてくるのではないかと考えている。

軍人年金や人権侵害犯罪被疑者である軍人の裁判にかんするマニーニ・リオスの言動は、彼が軍のロビイストであると考えれば容易に理解できる。ガルセは、「今まで政軍関係といえば軍政期の人権侵害が重要だったが、マニーニ・リオスは軍人とその家族の生活と福祉という全く違うテーマから台頭した」と指摘する。ダンサも「軍人政党はウルグアイでは初めての現象だ」という。カビルド・アビエルトは「軍人の、軍人による、軍人のための政党」であり、マニーニ・リオスはポピュリストではなく、計算づくの軍の利益代表なのだろう。したがってマニーニ・リオスは、リーリャやガルセがいうように「ボルソナロではない<sup>30</sup>」。

では、彼は本気で大統領になるつもりなのか？ お

そらくそうではないだろう。今回の大統領選挙では、与党拡大戦線は得票率1位にはなるものの、決選投票で伝統2政党のコアリションに阻まれて、国民党のラカジェ・ポウに逆転されるというのがもっぱらの見方だった。しかしいずれの政党も単独で上下両院で過半数を占めるほどの勢力ではない。ガルセの計算によれば、2万3千票の得票で下院議員1人が、7万5千票で上院議員1人が当選する。現役軍人が約2万8千人<sup>31</sup>、退役軍人が約5万人、家族を含めれば票田は約15万票になる。これを固めれば、上院で複数の議席がとれる。マニーニ・リオスは伝統政党の連立のかなめとして、ラカジェ・ポウに自分を高く売りつけることができるだろう。

### マニーニ・リオスが語らないこと

彼が語ってしかるべきであるのに、まだ語っていないことがある。それは軍政を、軍政期の人権侵害をどう考えているのか、ということである。ウルグアイのマスメディアはなぜ、マニーニ・リオスに独裁について質問しないのか？ 内田のこの素朴な問いに、デマシは「彼は今までは、単純に質問を無視し、次の質問をどうぞ、ということでも乗り切ってきた」という。またダンサは、マニーニ・リオスは冷戦期の出来事について当事者ではなくオブザーバーであるかのような顔をする、という。距離をおいているのだ。軍政については口にしないほうが有利である、と考えているのだろう、とダンサは推測している。しかしいつまでもそういうわけにはいかず、時間がたてばたつほど、マニーニ・リオスはさまざまな事柄について発言を求められる機会が増え、その分失言のリスクが多くなる、とダンサはみなしている。

マニーニ・リオスは大統領候補を順繰りに招いていくテレビ番組でも、軍政について語っていない。しかしこれはいかにも不自然であり不誠実である。SERPAJ-Uruguayのアギーレによれば、マニーニ・リオスが軍政期に勤務した第14基地の外のブドウ畑で、2011年にフリオ・カストロ(Julio Castro)の遺体が見つかった。カストロは、その遺体の状況から故意に死に至らしめられたことが明らかで、その結果、軍人がいつもいう「組織としての犯行ではなく、個々の軍人がやりすぎた結果、被害者は死んでしまった」という言い訳が嘘であることが明白になった。翌年にはリカルド・ブランコ(Ricardo Blanco)の遺体も見つかった。アギーレによれば、現在このブドウ畑は、判事の指示によって軍人も民間人も入れないようになっており、判事が命じればいつでも調査チームが入れるようになってきているという。さらに、いよいよ選挙戦も開幕という時期の2019年8月末には、調査チームが第13基地で遺体を発見した。拡大戦線の現代表J・ミランダ(Javier Miranda)の父が2005年に発見された場

所から100m、深さ80センチのところに石灰に覆われて埋められていた遺体は、10月になって、1975年10月に拘禁された共産党の活動家、E・ブレイエル(Eduardo Bleier)であることが明らかになった<sup>32</sup>。マニーニ・リオスは第13基地での遺体発見の報にさいして、「良いニュース、もっと遺体が発見されますように」とコメントしている<sup>33</sup>。遺体の身元が判明した時にはノーコメントだった。遺体には拷問の跡がある。

拡大戦線は多かれ少なかれ、軍政期人権侵害の真相究明に取り組んできたが、伝統政党はこの問題に熱心ではない。内田は、マニーニ・リオスが当選し、伝統政党による連立政権の一翼を担うようになる場合、軍政期人権侵害問題の真相究明と訴追の予算が削られ、問題がないがしろにされるのではないかという懸念を有している。ガルセは、今後あり得る国民党－コロラド党－カビルド・アビエルト党の「連立政権」について、「まだ軍政が敷かれていた時期に政治学の研究を始めた世代として、また一市民として、軍の政治への関与が強まることに恐怖感を覚える」と率直に述べた。また、ガルセより年長世代に属するボティネリは「ウルグアイにおける軍政期の人権侵害問題は、拷問や殺害、強制失踪に関わった者と被害者間の個人の問題に矮小化されてしまっている。真相究明は、二度と同じことを繰り返さないという反省のために行われるものであって、過去の復讐のためではない。拡大戦線政府はこのような問題意識に立った上での軍隊教育を一切行っただけでなかった」と強い口調で述べた。前掲のフリオ・カストロに私淑しており、唐突に師を失ったボティネリにとって、「マニーニ・リオス現象」は拡大戦線が過去の教訓を活かすことに失敗したことを突きつける、強い憤りを喚起するものなのであろう。

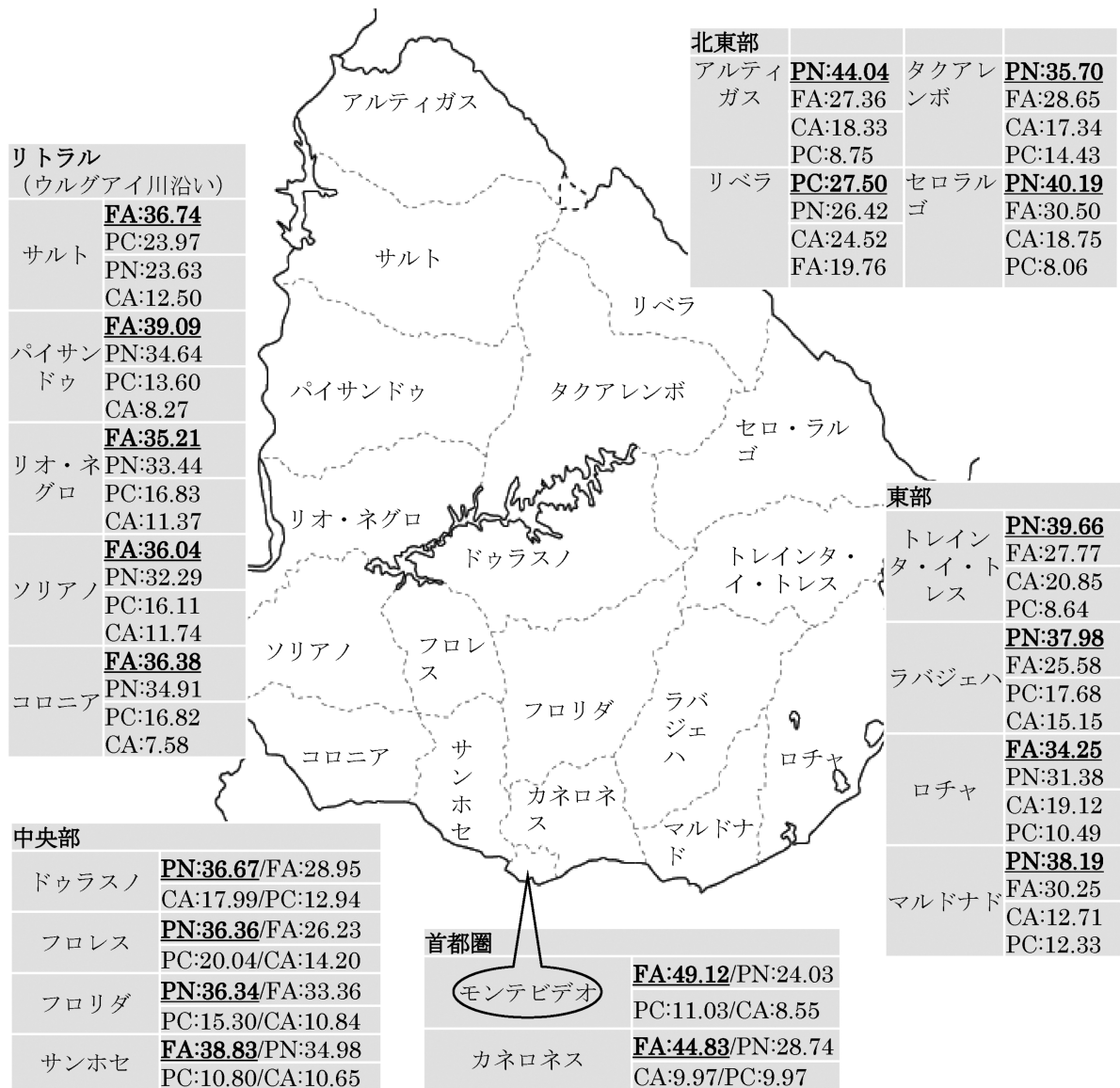
### おわりに

10月27日の第1回投票でカビルド・アビエルトは268,736票を獲得し、与党FA、伝統2政党に次いで得票率4位につけ、上院でマニーニ・リオス夫妻を含む3議席、下院で11議席を獲得する躍進ぶりを見せた。県別では得票率3位に食い込む県もあり、北東部のリベラ県では24%を超える票を得た。軍の基地がある地域で強い支持があることが確かめられよう(図1参照)<sup>34</sup>。決選投票でラカジェ・ポウは僅差で勝利したが、国民党が上院で10、下院29、コロラド党が上院4、下院13議席なので伝統政党だけでは過半数に届かない。カビルド・アビエルトはキャスティング・ボートを握った。しかしマニーニ・リオスは、「公務員が公務上知りえた犯罪について告発を怠った」刑法177条違反で訴追されており、最高裁は彼の議員不逮捕特権剝奪を議会に要求している(次期議会で議論される予定<sup>35</sup>)。さらに彼は、選挙運動禁止期間すれすれに、現役・退役軍人に対し「拡大戦線は組織としての軍を攻撃してき

た。マルクス主義を我が国から根絶しよう。軍人はマルティネスに投票するな」と呼びかけて発足前の連立政権内で早くも不協和音を奏でている<sup>36</sup>。ラカジェ・ポ

ウはマニーニ・リオスを制御できるか。マニーニ・リオスは政治の素人がほとんどの自党議員団を制御できるか。今後の展開が注目される。

図1：主要4政党の県別得票率



出典：El País Uruguay, <https://www.elpais.com.uy/informacion/politica/mira-todos-resultados-elecciones-octubre.html>  
(開票率100%)

凡例：FA：拡大戦線、PN：国民党、PC：コロラド党、CA：カビルド・アビエルト

※下線はそれぞれの県で最大得票した政党を示す。



## 付記

今回の調査に当たっては在ウルグアイ日本大使館政務クラーク、アンドレア・ルスリアガ(Andrea Luzuriaga)氏の多大なる協力を得た。ここに記して感謝の意を表したい。また、今回の調査では共和国大学サルト分校のフアン・ロメロ(Juan Romero)氏の協力を得、サルト県において元政治囚3名に対しインタビューを行った。本稿本文には直接反映されていないものの、歴史的記憶に関わる彼らの貴重な証言は「マニーニ・リオス現象」を考える上でも示唆に富むものであった。合わせて謝意を申し上げる。

なお、本稿における中沢の見解は個人に属するものであり、所属機関の見解を示すものではない。

(内田みどり 和歌山大学、中沢知史 京都外国語大学ラテンアメリカ研究所客員研究員、元在ウルグアイ日本大使館専門調査員)

- 1 村上勇介編『21世紀ラテンアメリカの挑戦：ネオリベリズムによる亀裂を超えて』京都大学学術出版会、2015年、序章「ネオリベリズム後のラテンアメリカ」(村上勇介)、8-9頁。
- 2 もちろん、ウルグアイにも退役後に政治に関わった軍人がいなかったわけではない。例えば拡大戦線の創設者であるセレグニ(Liber Seregni)はもっとも著名な例である。
- 3 カビルド・アビエルトは、スペイン植民地時代に緊急時に行なわれた住民による臨時集会のことである。
- 4 Guido Manini Ríos, *Vengo a cumplir*, Artemisa Editores, 2019, pp.13-26.
- 5 ウルグアイ軍部を研究したF・アマドによれば、司令官人事は2月に決定されるが、大統領就任年(就任式は3月1日)の人事は現職大統領と次期大統領が相談して決めるという。また將軍や総司令官の昇進では年功序列が重視されるが、軍は伝統的にコロラド党寄りであるので、国民党や拡大戦線は年功序列に沿った人事をしていない。マニーニ・リオスは年功序列20位で將軍に昇進したという。Fernando Amado, *Bajo sospecha: militares en el Uruguay democrático*, Random House Editorial Sudamericana S.A., 2013, p.50, p.68, p.144.
- 6 Manini Ríos, *op. cit.*, pp.21-52.
- 7 *Ibid.*, p.18, pp.55-56, 27/12/2018, *El Observador*
- 8 ラス・ピエドラスの闘いは、独立戦争期に軍人ホセ・ヘルバシオ・アルティガス(José Gervasio Artigas)がスペイン軍に対して勝ち得た最初の大きな勝利。アルティガスはウルグアイ独立の英雄とされる。マニーニ・リオスの発言については後述する。
- 9 軍人の年金は他とは別建てで額も多く、国家から補助を受けていた。
- 10 11/09/2018, *El Observador*
- 11 31/12/2018, *El Observador*

- 12 27/12/2018, *El Observador*
- 13 30/03/2019, *El Observador*
- 14 30/03/2019, *El Observador*
- 15 28/07/2019, *El Observador*
- 16 02/07/2019, *El Observador*
- 17 19/08/2019, *El Observador*
- 18 *Busqueda*, 19 de Septiembre, p.9
- 19 13/08/2019, *El Observador*
- 20 17/09/2019, *El Observador*
- 21 ベリオス事件とは、チリ秘密警察の一員でサリン製造、レテリエル事件への関与が疑われるエウヘニオ・ベリオス(Eugenio Berríos)を、ピノチェト裁判で証言させないように1991年に秘密裏に彼をウルグアイに移送、軟禁したものである。ベリオスは1992年12月に逃亡するものの再度つかまり、以後消息不明となる。1995年に彼らしき死体が見つかり、2002年に最終的に身元が確認された。
- 22 18/06/2019, *El Observador*, 23/12/2016, 24/12/2016, *El País*.
- 23 05/09/2019, *La República*
- 24 20/08/2019, *El Observador*. パンツァーファウスト(戦車への拳)とは、第二次世界大戦中にドイツ軍が用いた携帯対戦車用擲弾発射機のこと。88はHile Hitlerを意味する。
- 25 José Rilla, *La actualidad del pasado: usos de la historia en la política de partidos de Uruguay 1942-1972*, Debate, 2008
- 26 28/07/2019, *El Observador*
- 27 27/08/2019, *El Observador*
- 28 12/09/2019, *El Observador*
- 29 17/07/2019, *El Observador*
- 30 リーリャは、彼がマクリやボルソナロならば拡大戦線が歯止め役としてアピールできるのだが、と嘆息した。
- 31 2017年ミリタリーバランスでは陸軍16,250人、海軍5,400人、空軍3,000人となっている。外務省ウェブサイト「ウルグアイ東方共和国」基本情報より(2019年10月8日閲覧)。
- 32 07/10/2019, *El Observador*
- 33 28/08/2019, *El Observador*
- 34 Corte Electoral 2019年11月26日 閲覧。 08/11/2019, *El Observador*
- 35 04/10/2019, 08/11/2019, *El Observador*
- 36 22/11/2019, 25/11/2019, *El Observador*

新聞はすべて電子版による

オブセルバドール紙ウェブサイト

<https://www.elobservador.com.uy/>

レブプリカ紙ウェブサイト

<http://www.lr21.com.uy/>

外務省ウェブサイト ウルグアイ東方共和国

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/uruguay/index.html>